

ウィキペディア

民芸運動

出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

民芸運動（**民藝運動**、みんげいうんどう）とは、**1926年**（**大正15年**）、「日本民藝美術館設立趣意書」の発刊により開始された、日常的な暮らしの中で使われてきた手仕事の日用品の中に「用の美」を見出し、活用する日本独自の運動。**21**世紀の現在でも活動が続けられている。「民芸」とは、民衆の工芸の意^[1]。

目次

概要

民芸運動に対する評価

思想家

陶芸家

木工家

染織家

版画家

建築

その他

関連項目

脚注

参考文献

関連書籍（近年）

概要

日本民藝館の創設者であり民芸運動の中心人物でもある柳宗悦は、日本各地の焼き物、染織、漆器、木竹工など、無名の工人の作になる日用雑器、朝鮮王朝時代の美術工芸品、江戸時代の遊行僧・木喰（もくじき）の仏像など、それまでの**美術史**が正当に評価してこなかった、西洋的な意味での**ファインアート**でもなく高価な古美術品でもない、無名の職人による民衆の美術工芸の美を発掘し、世に紹介することに努めた（柳が収集活動を行っていた時代の日本では「李朝」という用語が一般的で、柳自身ももっぱら「李朝」を用いているが、本項では「朝鮮王朝時代」の表記を用いる）。

雑誌『**白樺**』の同人であり西洋近代美術の紹介者でもあった柳は、**1914年**（大正**3**年）、朝鮮陶磁研究家の**浅川伯教**との出会いを通じて**朝鮮の美術**に関心をもつようになり朝鮮王朝時代の白磁、**朝鮮民画**、家具などの素朴な美を世に紹介することに努めた。

1923年の関東大震災の大被害を契機として京都に居を移した柳は、濱田庄司、河井寛次郎らとともに、いわゆる「民芸運動」を展開した。柳、濱田、河井らは、当時の美術界ではほとんど無視されていた日本各地の日常雑器、日用品など、無名の工人による民衆的工芸品の中に真の美を見出し、これを世に広く紹介する活動に尽力した。運動の中心であった柳は、当時ほとんど研究が進んでおらず、美術品としての評価も定まっていなかった日本各地の民衆的工芸品の調査・収集のため、日本全国を精力的に旅した。

柳はこうして収集した工芸品を私有せず広く一般に公開したいと考えていた。当初は帝室博物館（現在の東京国立博物館）に収集品を寄贈しようと考えていたが、寄贈は博物館側から拒否された。京都に10年ほど住んだ後にふたたび東京へ居を移した柳は、実業家大原孫三郎（株式会社クラレ、大原美術館、大原社会問題研究所などの創設者）より経済面の援助を得て、1936年（昭和11年）、東京・駒場の自邸隣に日本民藝館を開設した。木造瓦葺き2階建ての蔵造りを思わせる日本民藝館本館は、第二次世界大戦にも焼け残り、戦後も民芸運動の拠点として地道に活動を継続している。

「民芸品売り場」「民芸調の家具」など、現代日本語の表現として定着している「民芸」という言葉自体が、柳らによって使い始められた造語である。



木喰仏

民芸運動に対する評価

民芸運動は熱烈に歓迎されるか、無関心、不快のうちに黙殺される傾向にあった^[2]。正面切って民芸運動を批判した数少ない人物の一人として北大路魯山人が挙げられる。北大路は1930年から31年にかけて自身の主宰する『星岡』において激しい非難を浴びせたが、柳らはこれを黙殺した。

むしろ、運動から離脱していく者から批判が加えられる事態が幾度か見られている。富本憲吉は手仕事における機械の使用に対する見解の不一致から、理論的に折り合いがつかなくなり離脱した。また、三宅忠一は個人作家が民芸に関与することの弊害を説き、個人作家と職人の共存を望む柳と意見が合わず、民芸運動を離脱して新たに日本民藝協団を設立した。民芸運動の理論は柳個人が支える部分が大きく、同じく離脱した青山二郎は「柳宗悦個人の意識を民藝の美と称するものから取去つて見給へ、美術館は消えてなくなるだろう。だからその他大勢は概念の虜である」^[2]と述べている。

思想家

- 柳宗悦 日本民藝館館長
- 浅川伯教
- 浅川巧
- 外村吉之介 倉敷民藝館、熊本国際民藝館館長
- 池田三四郎 松本民芸家具創設者
- 式場隆三郎
- 吉田璋也 鳥取民芸美術館創設者
- 青山民吉

陶芸家

- バーナード・リーチ
- 河井寛次郎
- 濱田庄司
- 富本憲吉
- 金城次郎
- 船木道忠
- 奥田康博

木工家

- 黒田辰秋
- 安川慶一

染織家

- 芹沢銈介
- 青田五良
- 平良敏子
- 岡村吉右衛門

版画家

- [棟方志功](#)
- [長谷川富三郎](#)

建築

- [高林兵衛](#)
- [吉田徳十](#)

その他

- [坂本万七](#)
- [山本為三郎](#)
- [吉田璋也](#)
- [安部榮四郎](#)
- [青山二郎](#)
- [石丸重治](#)

関連項目

- [水尾比呂志](#)
- [熊倉功夫](#)
- [寿岳文章](#)
- [志村ふくみ](#)
- [日本民藝協会](#)
- [鳥取民芸美術館](#)
- [倉敷民藝館](#)
- [豊田市民芸館](#)
- [白樺派](#)
- [アーツ・アンド・クラフツ](#)
- [バウハウス](#)
- [上賀茂民芸協団](#)
- [民具、民俗資料](#)
- [朝鮮民族美術館](#)
- [en:Mingei International Museum](#)

脚注

- ↑ 竹内誠監修 『知識ゼロからの博物館入門』 幻冬舎　2010年　34ページ)
- ↑ ^a ^b 栗田 2006, pp. 280-290.

参考文献

- 栗田邦江、福田アジオ（編）、2006、「民藝運動」、『結衆・結社の日本史』、山川出版社〈結社の世界史〉 ISBN 4634444100

関連書籍（近年）

- 志賀直邦 『民藝の歴史』（ちくま学芸文庫、2016年）。柳の門下生による記録
 - 『サヨナラ、民芸。こんにちは、民藝。』（里文出版、2011年2月、改訂新版2016年7月）、柳宗悦を巡る六つの対話
 - 『民芸運動と建築』（淡交社、2010年12月）、藤田治彦・川島智生・石川祐一・濱田琢司・猪谷聡 共著
 - 熊倉功夫・吉田憲司共編 『柳宗悦と民藝運動』（思文閣出版、2005年）、14篇の論考
-

「<https://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=民芸運動&oldid=70537378>」から取得

最終更新 2018年11月6日 (火) 10:56（日時は個人設定で未設定ならばUTC）。

テキストは[クリエイティブ・コモンズ 表示-継承ライセンス](#)の下で利用可能です。追加の条件が適用される場合があります。詳細は[利用規約](#)を参照してください。